

## 論文概要

東京医療保健大学

医療情報学科

学籍番号 H07013

H07059

氏名 岩谷 典美

萩原 彩香

### 市販弁当の付加価値に関する調査データを用いた コンジョイント分析の応用

本研究は、本学の医療栄養学科と医療情報学科が協働で行った研究である。医療栄養学科と収集した「市販弁当の表示に対する付加価値調査」のアンケートデータから、対象の学生が市販弁当を購入する際にどのような点を重視しているかを明らかにすることを目的とした。

消費者が商品を購入する際にどのような点を重視し何を見て買っているのかをユーティリティスコアという評価点数を用いることで弁当の表示に対する重要度を点数化し、目に見える形で評価出来るコンジョイント分析を本研究では採用した。この分析は、表明選考法の1つで環境評価法として主に用いられており、海外では市場調査などでよく使われているこの分析では、調査の際にプロファイル(試作品)をいくつか提示して対象者に選択させるが、本研究では一対比較法を採用し、2つのプロファイルを提示して対象者に好ましい方を選択させる質問形式(計8回)をとった。

アンケート調査は同意の取れた本学の学生1年生～3年生を対象とし、平成22年7月に行った。672人から回収され、そのうちの525人のデータが有効回答であった。しかし、男子学生から十分な回答数を得ることが出来なかったため、最終的に女子学生437人を対象として分析を行った。学科比較において、看護・医療情報学科に共通した特徴がみられたため、看護学科と医療情報学科を「一般」と1つにまとめて分析を実施した。その結果、医療栄養学科と一般ではユーティリティスコアに大きな違いがみられた。また、「栄養バランス」の重要度を学年別に比較した結果、医療栄養学科では1年次からユーティリティスコアが一般より高く、また、学年が上のほうがスコアが高かった。一般では2年次に高くなり、3年次に低くなっていた。本結果より、一般と医療栄養学科のユーティリティスコアの違いは、栄養に対する興味・関心の違いによるものと示唆された。また、一般の2年次のスコアが高くなった理由として、1年生の後期(10月～2月)に開講された「栄養学」の授業の影響が考えられた。一般ではその後栄養に触れる授業はなかったため3年次にはスコアが下がったと考えられた。その反面、医療栄養学科は継続して栄養の教育を受けているためスコアは下がらなかったと考えられた。以上から、栄養バランス弁当に対する購買行動は食育が大きな影響を与えていること、効果を得るためには継続的に食育を行うことが重要であることが示唆された。

# 目次

第1章	はじめに	P1~P2
第2章	目的	P3
第3章	表明選考法(研究方法の解説)	
	3.1 仮想評価法(CVM)	P4
	3.2 コンジョイント分析	P4~P5
第4章	研究方法	
	4.1 概要	P6
	4.2 アンケートの作成	P6
	4.2.1 一対比較法	P6
	4.2.2 プロファイルの作成手順	P6~P9
	4.3 分析方法	P10
	4.3.1 仮想評価法(CVM)の分析手順(重回帰分析)	P10~P13
	4.3.2 コンジョイント分析に関する分析手順 (多変量ロジスティック回帰分析)	P13~P14
第5章	結果	P15~P16
第6章	考察	P17
第7章	まとめ	P18
	謝辞	P19
	参考文献	P20~P25
	付録	P21